

中 北 海 道

現代俳句協会

会 報

99号

令和5年
12月5日発行

雪虫は、木々の辺りから湧き出るように飛び交い、粉雪が舞っているようだった。

雪虫の夏の姿は綿をつけて儂げに飛ぶ様子とは異なる。薔薇などの芽や葉裏にびっしりと貼りつき、花を台無しにする、緑色のゴマ粒のようで気持ちの悪い厄介者だ。

雪虫も綿虫も何気なく使っていたので、その違いを大小数冊の『歳時記』で調べてみた。雪虫は春の季語で、二月ごろ、雪の上に現れて動き回る虫、跳虫・川螻蛄・揺蚊などの俗称とあった。綿虫は冬の季語で、傍題に大綿・雪螢・白粉婆・雪婆・雪虫ともいう。白粉婆・雪婆は、人間臭い呼び名で親しみがある。「雪ばんば、雪ばんば、雪を背負っておいでやよ」という童謡を静岡出身の句友から教えられていたこともあり、ことさらその思いを深くした。

近年、冬の異常気象も激しい。先人の名句を味わいながら、この冬が穏やかであることを祈りたい。

綿虫やそこは屍の出てゆく門 石田 波郷

はなやぎて与謝の雪虫舞ひにけり 加藤三七子

窖ちかく雪虫まふやのべおくり 飯田 龍太

紙漉いて村に雪ばんばを殖やす 長谷川双魚



草樹・雪華 林 冬 美

冬へのプロローグ

今年の夏は全国的に尋常ではない猛暑が続いた。北海道も例外ではなく、熱中症警戒アラートが何度も出たし、札幌の最高気温は観測史上最高の三十六・三℃を記録した。夏は長引き、秋分の日あたりからやっと秋めいて来た。北国の秋は短く、アツという間に長い冬がやってくる。

そろそろ雪虫が飛ぶ頃である。札幌生まれの私は子供のころから「この虫が飛び始めると手稲山に雪が降る」と聞いて育った。雪虫を掌に乗せてみると、黒っぽい光沢のある体に綿のようなものがついていてるので、綿虫とも呼んでいた。羽根があり、体長は二〜三ミリでふわふわ飛ぶ。かつて十一月に入ったころ、鴨々川のほとりで出会った

中北海道現代俳句協会

「令和五年度俳句研究交流句会」を終えて

組織活動部 中 田 琢 志

於・令和五年八月二六日（土）かでのる2・7 820研修室

札幌はこの夏は、異常に暑く、この日は3回目の猛暑日となりましたが、大会は冷房の効いた、かでのる2・7で、昨年引き続き対面で開催されました。出席者は三十六名で、昨年より七名多くなりました。うち十名は初めての参加者で、投句数は四十句でした。

五十嵐秀彦会長から、今回は点とりではない、本来の俳句研究交流句会とすべく、高得点者への賞品をやめて、出席者全員に参加賞を配布することにしたことの説明がありました。

会の進行は、近藤由香子氏と鹿岡真知子氏により、スムーズに行われました。選句のあと、恒例の参加者による所属等の自己紹介が行われました。続いて一光六客の選句結果が発表されたあと、全四十句に対して、特選の句評を中心に並選を含む、数名の方の意見がそれぞれ述べられました。和気あいあいの中にも、選をしなかつた方からの感想を含む忌憚のない意見交換でした。得点によらず一句一句に対して様々な観点からの議論となり、よい試みだったと総括されました。

は数字は
特選の数

令和五年度 俳句研究交流句会作品

- | | |
|-------------------|-------|
| 指踊る手話のふたりや鹿の子百合 | 宮下美紗子 |
| 1 缶蹴りのたびに夕焼け母が待つ | 林 冬美 |
| 風が風追う青い穂波へローカル線 | 齋藤 嫩子 |
| 2 奔放はサガンの砦夏の砂 | F よしと |
| 1 ふるさとの瀬音のきざむ大西日 | 江草 一美 |
| 朝日影菊の香紡ぎ句座囲む | 桂井 俊子 |
| 揚羽つまむ自虐に似たる指の先 | 田口くらら |
| 八月の号泣我の中の海 | 亀松 澄江 |
| 薫風に翼あずけて空の旅 | 近藤ゆたか |
| 世の中をシャッフルすべし青嵐 | 新津こずえ |
| 1 モノク口の虹を下絵にバンクシー | 小川 桂 |
| 1 其処此処に忍び笑ひや薔薇の蔭 | 荒川 弘子 |
| 2 甘酒の冷えてきりつと樹木希林 | 金子真理子 |
| 万緑や国籍といふユニホーム | 大河原倫子 |
| 1 高原の風を湛ふる冷蔵庫 | 齋藤 雅美 |
| カーテンを開け万緑の息を吸ふ | 齋藤 厚子 |
| 恋文で折る折り鶴の残暑かな | 及川 和弘 |
| 3 父吊りて父の音となる貝風鈴 | 中田真知子 |
| 4 葬の家裏に水着の干されゐて | 近藤由香子 |

踊着にまだ粗熱ののこりたる

信藤 詔子

2 振花のぐりぐり登ってゆく空よ

阿部 満子

2 にんげんの図鑑読み終へ夏薊

島崎 寛永

1 白日傘通りすがりの殺意かな

岡本 順子

1 羽根付きの餃子を剥がす薄暑かな

遠藤由紀子

立葵膝を交えて話そうか

坂本 眞紅

青岬迷彩服が立っており

平尾 知子

峠道とところどころに額の花

中田 琢志

万緑に溺れ声帯はびしょ濡れ

五十嵐秀彦

1 あめんぼう地球を蹴るは生きるため

古川 和

花茨人伝てに聞く郷の友

藤田 保子

1 レース編むこころ硝子にならぬやう

村瀬ふみや

知りすぎた眼の奥の蛇苺

瀬戸優理子

2 万緑に溺れてをりぬ午後ノ耳

小路 裕子

炎天にものみな白い正午すぎ

越後 裕子

5 濡れてゐる砂漠は水羊羹のなか

青山 酔鳴

1 黄金虫すつからかんで死んでゐる

松山 りさ

甘藍千切狂想曲がうしろから

鹿岡真知子

急かされる夕立予報ペダル踏む

石本 雪鬼

1 札幌がキャラメル色に暮れ晩夏

杉野 勝子

2 不確かな卵のなかの昼寢覚

吉田 貴蘭

第二十一回 大とかち俳句賞全国俳句大会報告

広報部 青山 酔鳴

令和五年九月二十四日、とかちプラザにて第二十一回大とかち俳句賞全国俳句大会がありました。俳誌『玉藻』主宰・星野高士氏の講演「北海道の天地」では第二十六回俳句甲子園決勝句などにも触れられました。また、会員の小川桂さんが雑詠句で大とかち俳句賞を受賞されたほか、多くの会員が入賞し顕彰されました。

第二十一回 大とかち俳句賞全国俳句大会入賞句一覧(関係分)

課題句・とかち俳句連盟賞(兼題・牛)

帯広市教育委員会教育長賞

十勝文化団体協議会賞
ゲルニカの牛陽炎の野に放つ
長野 君代

日本伝統俳句協会北海道支部賞
炎天や牛は骨格から動く
内野 弓子

優秀賞
虹の輪に踏み入る牛と少年と
西村 山憧
牛たちは柔らかい石蝶が来て
小川 桂
牛が寄り添うてゐる薫風のかたち
内野 弓子
牛呼べば丘がドドドと夏の雲
梨山 碧

課題句 選者特選作品

宮坂静生選

第一位 露草や牛の眼は闇湛へ (優秀賞共)
古川 和

中原道夫選

第一位 牛が寄り添うてゐる薫風のかたち
内野 弓子

第二位 牛の眼のぎよろり初蝶裏返る
林 冬美

第五位 王族のやうに寒衣の仔牛の眼
青山 酔鳴

雑詠句・大とかち俳句賞

いいひとがふわつと酔つて花ミモザ
小川 桂

十勝俳句連盟賞

金賞の牡丹もつとも疲れけり
平川 靖子

1頁〜2頁

大橋 弘典

雪搔いて搔いてこの世の裏に出る

阿部 満子

私は雪搔きをしていつてアスファルトの路面が見えたときはちよつと嬉しくなるが、この句の作者はその結果「この世の裏」に出てしまふという感覚を得る。もしかしたら積もつた雪の下に草花を認めたのかもしれない。生活の実感と詩的な構想力が存分に生かされた句。

十六夜や運河とジャズと異邦人

伊奈 青人

異邦人という言葉は概念的だ。その人の身体的特徴、文化、果ては同じ惑星に出自を持つものなのか、一切が読者にはわからないが唯一「差異がある」ということははつきりする。そんな異邦人と同じ時間、同じ場所、同じ音楽を共有しているのは不思議だが意味があるのだ。

狐火の量販店に出してしまふ

大河原倫子

狐火の伝承や正体には諸説あるが、どちらかといえば伝統的な世界に結び付くはずのものだ。なのにそれが量販店に出してしまうという驚き。しかし、クマが住宅街で人を襲う時世である。狐火もまた行き場を失っているのかもしれない。詩人にしか見えない狐火である。

3頁〜4頁

梶 鴻風

船旅の眠るまで揺れ秋の星

大橋 弘典

世界一周の船旅にあこがれる。だが一泊なら、苫小牧午後七時に出発すると翌日の十時に仙台に到着する。これも船旅だ。全長二〇〇mの船「いしかり」などは太平洋に浮かぶ丘である。眠りに着くまで、秋の星が船の揺れに従って揺れている。心地よい眠りに寝落つのだ。

水鳥の足は黄色いセルロイド

金子真理子

上五の「水鳥」に注目するなら、鶯鳥、白鳥、雁などは黄色。鶯鳥は橙色だが、黄色の濃い色に見える。秋のウトナイ湖で見られる。また下五の「セルロイド」に注目するならパパやママとお風呂に入っている玩具の水鳥だ。ただセルロイド製は昔の話であり、懐かしさを覚える。

本家より分家にぎはしきくらんぼ

倉部 仁子

本家から次男や三男が独立して家を持つことを分家という。商家や漁師などは別家とも呼ぶ。かつては賑やかだった本家も次男・三男が独立して出て行くと、分家の方が育ち盛りの子も増え賑やかになる。季語が十全にはたらいっており、子供らの声が聞こえてくる。楽しい句だ。

5頁〜6頁

青山 酔鳴

月の香の残る兎を売る露店

瀬戸優理子

一読にして一冊のファンタジーの背景に迷い込む感覚を得た。月の香が残る兎を売る店主はダンジョンで戦うバリバリアンとの取引ルートを持っているに違いない。月・兎・露店と季重ね感を厭わず詰め込んだ技ありの一句、隠喩を読み取るうとするのは野暮というものだ。

北半球けずるが如く深雪搔く

菅原 湖舟

道内でも地域によって積雪が随分と違うものだが、公費の除雪のサービス低下に伴い、多くの道民の手を煩わせるのが雪搔きだ。これについては年間にたくさんの実感あふれる秀句が詠まれるが、この句は非凡にもそれを北半球をけずるとしつ、自然の厳しさを深雪に預け秀句。

青葉木菟島の神事に踏み込まず

坂本 眞紅

北海道自体が島ではあるが、縁辺に所在する島嶼部には大方小さな神社や祠があつて、すべてではないにしても神事があるだろう。空を自由に往来する青葉木菟は人間の行う神事には一切口を出さないうように言い留めて一編の詩に認めている。

7頁〜8頁

中村みずほ

大根の青首さらし反抗期

田口くらら

青首大根は、その名の通り、土の上に出ている部分が青い大根である。暑さ寒さや病気に強く、成長が早く、甘みも強い。思春期で反抗的で生意気な息子を、青首大根に例えて、溜飲を下げつつも、実はその成長を喜んでいる。そんな肝っ玉母さんが目に浮かぶようである。

左手はまだリラ冷えのまま

西村 山憧

「まだ…のまま」である」というフレーズで、さつきまでのあれこれを想像させるところが心憎い。リラ冷えの夕方、恋人と仲違いして握りしめた「左手」。別れた後もそんな悔しさを引きずっている「左手」。「右手」なら殴ってしまう?! 大胆な季語使いも魅力的。

寵撃つ獵師射程の風を読む

林 冬美

風に乗って漂ってくる獣の匂い。気づかれぬよう風向きを読み、銃を構えて、ジリジリと距離を詰めて行く獵師の息遣い。事のよし悪しを超えて、人間と野性動物が命と命のやり取りをする瞬間。簡潔な表現を通して、その緊迫感が、ひしひしと伝わってくる作品である。

9頁〜10頁

多田 琴美

壊れても壊れても吹くしゃぼんだま

古川 和

しゃぼんだまは壊れるもの。壊れることはわかっても気にせずにごんごん吹く。ただ「吹く」という行為そのものの楽しむ遊び。形あるものはいつか壊れる。壊れるまでの時間の長さが違うだけだ。そうであるならば壊れることを恐れ、何もしないことを選択するのは愚かなことだと気づかされる一句。

踏まれゆく雪が水だといふ虚実

村上海斗

般若心経はすべてのものが実体として存在しないと説く。「色即是空 空即是色」白く綺麗な雪も踏まれて汚れ水となり、そして気体となる。この世の習いなのである。粒子力学上この世のものに実体はない。すべてが空。それは虚であり、実でもあるのだ。

春うらら貴女の今を微分する

悠 とし子

やわらかな「春うらら」に、硬さを感じさせる「微分」という対照的な取り合わせ。春の陽気に包まれ希望に満ちた貴女を、作者は冷静な視点でその変化の波を細かに分けて分析している。貴女を少し心配しながらも冷静に観察する心配性な作者がほほえましい。貴女を少し羨ましいとも思う、作者の複雑な心のうちさえ透けて見えてくるのだ。

第24回 中北海道現代俳句賞 作品募集・応募要領

- 1 応募作品 未発表20句（必ず題名をつける）※未発表の定義は「結社誌・同人誌・大会作品集などで活字化されていない作品」「ブログ又はSNS等Web上に発表されていない作品」とし、二重投句・過去の応募作品の再応募は不可
- 2 募集期限 令和5年12月15日消印まで
- 3 募集地域 石狩、空知、後志振興局管内在住者（会員以外のお応募可）
- 4 応募用紙 指定の用紙を使用 会員には会報98・99号に同封
会員以外の方は顕賞係へ返信用封筒に〒・住所・氏名を記載し切手貼付のうえ指定の用紙を請求下さい（協会HPからダウンロードも可）
- 5 応募方法 応募料三千円を定額小替為・現金書留にて指定用紙を同封
- 6 顕 彰 令和6年4月7日の北海道現代俳句大会席上にて行う
- 7 作品送付 〒061-2284 札幌市南区藤野4条5-19-6 菅井美奈子方
中北海道現代俳句協会 組織活動部行
- 8 選 者 五十嵐秀彦・石川美智子・齋藤雅美(新)・松王かをり・渡辺のり子・瀬戸優理子の6氏
- 9 問合せ先 会長 五十嵐秀彦 011-852-7014 顕彰係 菅井美奈子 011-592-6426

第四二回 時雨忌全国俳句大会 (関係分)

小川 軽舟選 入選 七階の窓鳥の巢のよくみえて 古川 和

第六〇回 現代俳句全国大会 (関係分)

宇多喜代子特選・佳作 一本は神に残して山櫻 平川 靖子
秀逸賞 草も木も立ってゐるから雪が降る 新出 朝子

二〇二三年 鴨々川ノスタルジア 口伝すすきの怪談

一般部門 河崎秋子賞・鴨ノス賞

小説「白いすあま」 梨山 碧

北海道の開拓は男が開墾し活躍したと皆思っているであろ
う(中略)土地の開拓に挫折し一時しのぎに稼いでから故郷
に戻ってしまうものが多く、そんな男たちを繋ぎとめる為
に官営対策の労働者対策として遊郭設置がされたのは、もうこ
のお話を聞いている人には常識みたいなもんじゃらうね。女
は男を寒い大地に留める為の楔になった。楔ってなんだろう
かと今でも考えることがあるが、要するに人柱みたいなもん
じゃね。まあ、人間、命、人権とか遠い話だった。(以下略)

第五七回 北海道新聞文学賞

詩部門本賞

詩集『壁、窓、鏡』 故永しほる

真冬の風鈴のように
鍔の眩暈が濡れて
滴る先で
思うことなく
装置する、

眼球の
事実は空洞を行って
そこに

状況との限らない一致があり
魂への疑いだけが
人間であると
見ることによって
(状態／常態より・以下略)

第33回 中北海道現代俳句大会のご案内

- 1 日 時 令和6年4月7日(日)13時半より
- 場 所 かでる2・7 710号室 札幌市中央区北2条西7丁目1 TEL 011-204-5100
- 会 費 大会費:1,000円 当日受付にて申し受けます
- 2 講 演 石川 青狼氏(現代俳句協会評議員・東北北海道現代俳句協会会長・釧路俳句連盟会長)
- 3 演 題 「未 定」
- 4 講 評 道内外主要作家
- 5 応募規定 2句1組 1,000円 但し高校生以下は4句まで無料 新作未発表作品に限る
所定用紙または200字詰原稿用紙(所定用紙は協会HPからもDLできます)
※出句料(定額小替為等)は作品に同封する(返金不可)
- 6 送付先 〒063-0811 札幌市西区琴似1条1丁目2-38 琴似コート614号室
金子真理子 TEL 011-644-5193
- 7 締 切 令和6年1月17日(水)必着
- 8 賞 品 大会賞他
- 懇親会 ホテルポールスター札幌(中央区北2条西7丁目)にて午後4時半から
懇親会費 6,000円 当日大会受付にて申し受けます
※懇親会のキャンセルは当日3日前まで。連絡無き欠席の場合は会費を頂戴します
※コロナ感染状況により変更になる場合があります

○なお当日は第24回中北海道現代俳句協会賞の顕彰も併せて行われますのでご了承ください

礎

藤谷和子

略歴 昭和二年（令和三年、享年九四歳）
権太真岡生まれ。昭和三四年「水下魚」入会。
昭和三九年「四季」入会。昭和六二年第一句
集『瞬』発刊。平成三年「静」入会。平成九
年第二句集『生年月日』発刊。平成二十一年
「草木舎」立ち上げ。

風のなかの我がこゑ聴けり夜の秋
梅雨はげし狂ふすべなく椅子置かれ
ほほゑみにきれいなしはれぶつつかる
咲き切つて途方に暮れてゐる桜
薬包の隅で小さく亀鳴けり

亀松澄江 抄出

〔青のフロント〕佳句抜粋

熱過ぎるたこ焼き中和するアイス 谷 花丸
星になる噴水野外コンサート 近藤由香子
五本目のベースの弦は盆の月 藤原ハルミ
豊年や乳房を弾くやうな雨 増田 植歌
オルゴール閉づ満天の星の下 松山 りさ
新走り刺客の毒を消し去らむ 村瀬ふみや
秋縮む露地の止め石固結び Fよしと

幹事会報告

令和5年9月21日(木) かでる2・7(610室)

- 1 俳句研究交流句会結果報告（組織活動部）
- 2 令和5年度総会及び新年会について（事務局）
- 3 第24回中北海道現代俳句賞（組織活動部・顕彰係）
- 4 会報99号（広報部）
- 5 第33回中北海道現代俳句大会（事業部）
- 6 その他 / 7 新会員推薦/募集/会員動向（事務局）

出席者12名：石本・亀松・Fよしと・青山・阿部・遠藤・金子・近藤・鹿岡・菅井・中田M・中田T

令和5年11月16日(木) かでる2・7(610室)

- 1 令和6年度総会及び新年交流会について（事務局）
- 2 令和6年度第33回中北海道現代俳句大会（事業部）
- 3 第24回中北海道現代俳句賞（組織活動部・顕彰係）
- 4 三役・顧問・選者の会（事務局）
- 5 会報99号（広報部）
- 6 その他 / 7 新会員推薦/募集/会員動向（事務局）

出席者13名：五十嵐・石本・亀松・Fよしと・青山・阿部・遠藤・金子・瀬戸・近藤・鹿岡・中田M・中田T

令和6年度 道内現代俳句大会のご案内

第33回

北海道現代俳句大会
(南北海道現代俳句協会主管)

- ◇日時 令和6年6月9日(日) 13時半より
- ◇会場 ホテルリソル 函館市若松町6-3
- ◇講演 対馬 康子氏 現代俳句協会副会長
- ◇演題 未定
- ◇出句 2句一組 1,000円 所定用紙
- ◇懇親会 ホテルリソルにて16時より

◆出句締切・応募先他は現在調整中
改めてご案内申し上げます

第34回 北北海道現代俳句大会

- ◇日時 令和6年4月14日(日) 13時より
- ◇会場 ときわ市民ホール(旭川市)
- ◇講演 松王かをり氏 演題未定
- ◇締切 令和6年2月10日(日) 必着
- ◇応募 〒078-8320 旭川市神楽岡10条1丁目2-2 加藤ひろみ方 TEL 0166-65-0820

第30回 東北海道現代俳句大会

- ◇日時 令和6年4月21日(日) 14時より
- ◇場所 交流プラザさいわい(釧路市)
- ◇講演 石川 青狼氏 演題未定
- ◇締切 令和6年3月6日(水) 必着
- ◇応募 〒088-0612 釧路郡釧路町雁来1-34 西村奈津方 TEL 0154-55-4588

◆いずれも出句は2句一組 1,000円 (所定用紙)
懇親会は大会に引き続き開催予定・詳細調整中

◆事務局だより

今年の秋は例年にならない暑さでした。十一月に入ると急速に冬へとかわってゆきました。地球の環境変化は年々激しくなっています。八月末に開催した「俳句交流研究会」は例年の運営方式を見直し、点数の多寡にとられず、参加者全員による鑑賞を主軸として自由な意見交換を致しました。おおむね好評をいただきましたので、次年度も同様に進めたいと思います。この際に新しく入会された方々を歓迎いたします。十一月の現代俳句大会においては平川靖子さんが宇多喜代子特別選者賞と佳作を、新出朝子さんが秀逸賞を受賞。

また、故永しほるさんが第五七回北海道新聞文学賞詩部門本賞受賞。みなさまにお祝いを申し上げます。大とかち俳句賞全国俳句大会などさまざまな大会での会員諸氏のご活躍も特筆いたします。中北海道現代俳句賞の締切まであとわずか。多くのご応募を心より待ちしております。(Fよしと)

編集後記

真夏を残したままの秋はあまりに短く終わって、冬が駆け足どころか飛行機に乗ってきたようです。八月の俳句甲子園本選出場の旭川東高校は準優勝の快挙となりました。小根楓子さんの「どうしても道民であ

る墓」という句が会場に、ある意味衝撃を与えたことを道民として誇らしく思います。各種俳句大会などでは会員のみならずのご活躍も著しい中、俳句以外の賞の受賞者が出たことは記すべきことでしょう。第五七回北海道新聞文学賞詩部門本賞受賞の故永しほるさんは二十六歳の若さです。昨年の道新短歌賞・俳句賞の受賞者も二〇代。この世代が北海道の文学の未来を照らすともいえそうです。同時に、世界情勢や政治不安など先行きが見えない昨今、文芸でできることは何かを今一度自分にも問い直してみたいと思います。(青山酔鳴)

**令和6年度
総 会**

〈総 会〉

- ・日時 令和6年2月3日(土) 11時
- ・会場 かでる2・7 (730室)

〈新年交流会〉

- ・ホテルポールスター札幌

※往復葉書にて詳細をご案内いたします。恒例の一人一句集の募集も兼ねますので、必ず出欠をご返信ください。欠席の方は委任状に記名下さいますようお願い申し上げます。

会 員 動 向

〈入 会〉 藤田 保子・近藤ゆたか・成田恵美子
 〈退 会〉 大西 寿子
 〈住所変更〉 桂井 俊子 (地区内変更)

会員数 111名
 (令和5年10月31日現在)

〈ご入会のご案内〉
 ご友人やご家族の俳人をぜひご紹介ください。

**中北海道現代俳句協会
会費納入の御願い**

当会年会費2千円の納入は振込です。
 手数料もご負担ください。
 口座番号 02780-9-48961

発行人 五十嵐 秀彦
 発行所 中北海道現代俳句協会
 〒064-0952 TEL 011-641-1007
 札幌市中央区宮の森2条8丁目1-18 Fよしと方

編集人 青山 酔鳴
 〒061-1354 TEL 090-3398-3457
 恵庭市島松旭町4丁目9-1